

気候変動への対応 今こそアクションのとき



© UN Photo

「きょうは素晴らしい、歴史的な日となりました。これほど多くの指導者が一堂に会し、気候変動への対策を約束したことは、いまだかつてありません」とは、「気候サミット (Climate Summit)」を呼びかけた潘基文 (パン・ギムン) 事務総長のサミットでの言葉です。ニューヨークの国連本部に 9 月 23 日、120 を超える国・地域の首脳らに加え、企業や金融、市民社会のリーダーらが集結し、「2015 年末までに有意義かつ普遍的な気候合意を取りつける」という意志を明確に示しました。

2015 年末の妥結を目指している気候変動交渉にはずみをつける目的で開かれたサミットでは、各国の意欲的な行動計画を発表する首脳レベルのスピーチが行われました。日本の安倍晋三首相は途上国支援として、今後 3 年間で気候変動分野で 1 万 4 千人の人材育成を約束するとともに、特に小島嶼国への支援に力を入れることなどを誓いました。

気候変動への対策を求める声は、市民の間でも確実に高ま

りを見せています。ニューヨークのマンハッタン中心部では、サミットに先立つ 21 日、大規模なデモ「People's Climate March」が行われ、31 万人を超える人々が参加しました。事務総長やアル・ゴア元米副大統領らと並んでマーチに加わったのは、新たに国連ピース・メッセンジャーに任命された俳優のレオナルド・ディカプリオさん。サミットでは総会議場の演台に立ち、政府代表者やビジネス・リーダーらに向けて「気候変動はフィクションではなく、現実の喫緊の問題」だと警鐘を鳴らしました。

国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC) は 11 月 2 日、地球温暖化をめぐる最新の研究成果をまとめた統合報告書を 7 年ぶりに発表し、温室効果ガスの排出がそのまま続けば、「海面水位が大きく上昇するような特異な現象が発生するリスクが高まる」と指摘しました。12 月 1 日からペルーの首都・リマで開かれる国連気候変動枠組み条約(UNFCCC) 締約国会合 (COP20) では、気候サミットでリーダーたちが見せた意志の真価が試されます。

Strong UN. Better World.

～国連は 2015 年、創設 70 周年を迎えます～

国際連合は 1945 年 10 月 24 日に正式に発足しました。20 世紀の前半に、2 度にわたって悲惨な世界大戦を経験した反省を込めて、国際平和を維持するという大きな目的をもって創られた組織です。2015 年、国連は創設 70 周年を迎えます。「国と国との話し合いの場」である国連の 70 年の歴史を振り返った時、そこには世界が直面する様々な課題に勇敢に立ち向かう人々の姿が見えてきます。過去から現在、そして未来へと連なる歩み — その一部を、写真とともに紹介します。

■すべての人の権利のために

「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である」(第 1 条から)。世界中のすべての人がもっている基本的人権について述べた 30 項目からなる「世界人権宣言」は、1948 年 12 月 10 日に総会で採択されました。人権の抑圧が戦争につながったという反省から、人権の世界共有の具体的基準を記した宣言は、現代人権法の柱石となっています。その起草にあたった一人が、米国第 32 代大統領フランクリン・ルーズベルトの夫人で、米国の国連代表も務めたエレノア・ルーズベルトさんです。



©UN Photo

■厳しい状況下で生きる子どもを支える

芸術や音楽などの各分野で活躍する著名人が、その知名度を活かして国連活動を支えることはよく知られていますが、女優のオードリー・ヘップバーンさんもその一人です。1989 年に国連児童基金 (UNICEF) 親善大使に任命されたヘップバーンさんは、厳しい状況下で生きる世界の子どもたちの

ための活動を献身的に続けました。内戦や飢餓に見舞われたエチオピアやソマリアなど各地を訪れる晩年の姿は、今も人々の記憶に残っています。写真は 1953 年に国連本部を訪れ、UN Radio の収録に臨む一枚。



©UN Photo/AF

■試練に立たされた国連を鼓舞する演説

1961 年 9 月 25 日、ジョン・F・ケネディ 第 35 代米国大統領は国連総会の第 16 会期で演説を行いました。その 1 週間前、コン



©UN Photo/MB

ゴでの和平ミッションを遂行中のダグ・ハマーショルド 第 2 代事務総長が飛行機の墜落事故で亡くなるという悲劇が国連を襲ったばかりでした。ケネディ大統領は "A noble servant of peace is gone. But the quest for peace lies before us." (崇高な志を抱いた平和の奉仕者は逝った。だが、平和を希求する道は我々の前にある) と述べ、世界が直面する課題の解決に全力を注ぐよう呼び掛けました。

■人種差別との闘いを乗り越えて



©UN Photo/Pernaca Sudhakaran

総会の演壇で高々とこぶしを掲げるのは、ネルソン・マンデラさんです。1990 年 6 月 22 日、当時アフリカ民族会議 (ANC) の副議長を務めていたマンデラさんは、国連反アパルトヘイト特別委員会の会合で演説を行いました。反アパルトヘイト運動に身を投じ、27 年間に及ぶ獄中生活の後、初めて国連に姿を現した瞬間です。「アパルトヘイトという汚点を人類の歴史から消し去ることはできません。『もうたくさんだ』という声を上げるのにこれほど長い時間がかかったという事実は、良心あるすべての人々に永遠の非難、そして課題となって残るでしょう」



■教育が世界を変える

「1人の子ども、1人の教師、1冊の本、そして1本のペンが、世界を変えられるのです」。2013年7月12日、マララ・ユサフザイさんの国連本部での演説は、世界中の注目を集めました。女子教育の必要性を主張し、2012年に母国パキスタンでイスラム過激派組織タリバンに銃撃されましたが一命を取りとめ、その後も脅威に屈せず、教育の重要性を訴え続けています。今年、最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞したマララさん。「教育を最優先に (Education First)」の信念のもとに活動する姿は、同世代の若者だけでなく、多くの人々を勇気づけています。



©UN Photo/Rick Bajornas

■音楽の力を通じて平和のメッセージを

日本出身でただ一人国連ピース・メッセンジャーに任命されているのは、ヴァイオリニストの五嶋みどりさん。音楽の力を通じて平和のメッセージを届けます。今年は、潘基文事務総長の優先事項である「Every Woman Every Child」をテーマとする公共広告にも登場。「すべての子どもと女性の命を救う取り組みに協力を」と呼びかけるメッセージが、日本でも渋谷をはじめ都内数カ所で流れています。



©UNICEF Yangon

■ジェンダーの平等は男女の協力が不可欠



©UN Photo/Mark Garten

映画『ハリー・ポッター』シリーズで知られる女優のエマ・ワトソンさんも今年7月、国連の親善大使に加わった一人です。「フェミニスト」という言葉への偏見をなくしたいというワトソンさんは、UN Women 親善大使として女性の権利実現に取り組んでいます。9月に行われた「He For She」キャンペーンの発表会では、男女平等を達成するためには、女性だけでなく男性の参加が必要不可欠だと語りました。自身の経験を交えながら男女の協力を呼びかける姿は、ジェンダーの問題に対して勇気を出して行動する力を世界の人々に与えています。

■先住民族への人種差別を撤廃しよう



©UN Photo/Cia Pak

グアテマラの先住民族活動家で、ノーベル平和賞受賞者のリゴベルタ・メンチュウさんは、今年9月22日に開かれた総会の「先住民族世界会議」で演説を行いました。この中で、先住民族への人種差別を「人間の品位を傷つける精神的な病」と批判し、人種差別の廃絶に向けた国連の活動の重要性を訴えました。メンチュウさんは1993年の「世界の先住民の国際年」の初代大使を

務めた際、当時の事務総長から先住民族が暮らす世界29カ国を訪れる機会を得たといいます。そして今、その時に会った先住民族の人々が世界会議への代表者として集っている姿を誇りに思うと述べました。「平和は人生です。平和は教育であり、文化なのです」と述べる姿からは、一歩ずつ前進することの大切さがうかがわれます。

■東日本大震災、世界からの支援に感謝



©UN Photo/Mark Garten

世界の193カ国が集う総会議場は、加盟国間の交流の場所でもあります。東日本大震災から一周年を間近に控えた2012年3月9日、震災の犠牲者を追悼し、世界から日本に寄せられた支援に感謝を表すコンサートが、日本政府国連代表部らの主催で行われました。和太鼓演奏集団「鬼太鼓座（おんどこざ）」の力強いパフォーマンスや、東北地方に伝わる伝統芸能「湧水神楽（わくみずかぐら）」などが披露され、復興に向けて歩む日本の姿を深く印象づけました。

* * * * *

70周年を迎える国連は、"Strong UN. Better World." を合言葉に、これからも加盟国とともに歩み続けます。



考えてみませんか、国連でのキャリア

名古屋大学で会場からの質問に答える国際機関の人事担当者たち



昨年の東京でのミッションに続き、今年の「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」と呼ばれる採用説明会が、関西地方と名古屋で10月20日から3日間にわたって行われました。計7機関(*)の人事担当者による、各機関の活動内容、そこで働くことの意義、採用制度、必要としている人材などについて、説明会が行われました。

会場となったのは、同志社大学、立命館大学、名古屋大学、大阪大学、関西学院大学の5大学。国連をはじめとする国際機関への就職に関心を抱く大学生、大学院生、社会人が多数参加し、各会場は大いに沸きました。➤

国連機関が日本で採用説明会を開く理由

実は、国連で働く日本人はとても少なく、もっと優秀な日本人に来てほしいというのが国連の本音です。特に、日本の国連通常予算への分担率の高さ(通常予算の10.833%)に鑑みて、国連システムで働く日本人は全体のわずか2.5%ほどで、その少なさは際立っています。そのようなこともあり、諸機関が合同で採用説明会を日本で実施しているのです。

国連事務局に限って言えば、国の規模に考慮した日本人職員の数(「望ましい職員数」)の2分の1から3分の1にとどまっています。2013年末時点で、秘書・タイピスト・運転手などの一般職を除いたプロフェッショナル職員数は、国連事務局、国連児童基金

(UNICEF)、国連環境計画(UNEP)、世界保健機構(WHO)などの国連諸機関を含む国連システム全体で32,011人。日本人については、この内790人で、国連全体のプロフェッショナル職員の2.5%となっています。

国際機関で働く醍醐味とは？

各会場では、全体説明会(第1部)とグループ・セッション(第2部)の二部制が進められ、特に第1部では各国際機関の活動内容に加え、全体を通して以下のようなメッセージが寄せられました。

・国連をはじめとする国際機関には、平和・人権・開発はもちろん、財務・法務・人事・広報・安全管理など、広い分野に多くの職種が存在する。勤務先も世界中にある。

・グローバルな課題に多様な国籍の職員と一緒に取り組むのは、学ぶことが多い。職場は、直に様々な専門性と経験に触れることができる機会になっている。

・国際機関では女性の地位向上が進んでおり、特に女性にとって魅力的な職場である。

・国際機関で仕事を得るのは容易ではないが、何度も果敢にチャレンジして欲しい。筆記試験や面接は練習して慣れることができる部分もある。

・まずは自分が国際機関で何をしたいのか、どのように自分の専門性が世界の役に立つことができるか見極めることが必要。こうすることで、働きたい国際機関が徐々に見えてくる。



二カ国語表記の立て看板(立命館大学にて)



参加者からの個別質問に答える UNESCO の人事担当官(大阪大学にて)



UNICEF の担当者を囲み、時間を惜しんで熱心にアドバイスを求める参加者たち(関西学院大学で)

関西と名古屋で、初の合同採用説明会

人事担当官からの英語での説明に、一言も漏らさぬよう熱心に聞き入る参加者たち。世界に羽ばたき自己実現したいという意欲が、集まった人々から伝わってきます。国際化をめざし、優秀な若い人材に「グローバル化」の担い手になってほしいとの期待が高まる昨今ですが、それは単なる掛け声ではなく、若者自身が自らの手で築き上げていくものだという印象が強く残りました。

* 国連事務局、国連開発計画 (UNDP)、国連児童基金 (UNICEF)、国連教育科学文化機関 (UNESCO)、国連人道問題調整事務所 (OCHA)、国連人口基金 (UNFPA)、経済協力開発機構 (OECD)



同志社大学で全体説明を行うジョン・エリクソン
国連事務局アウトリーチ・ユニット・チーフ

「国際機関での仕事を自分のキャリアの選択肢に入れてもらいたい」という日本の若者への呼びかけは、全ての担当官のプレゼンテーションで強調されていました。

専門性だけでなく“人間力”も必要な職場

続く第2部では、参加者はグループに分かれ、各々が関心を持つ国際機関の担当者の下に集まりました。より直接的なキャリア・ガイダンスによって、将来国連で働きたいと考えている学生、社会人が様々な質問を担当官にぶつけていました。

例えば、「現在大手企業で働いていますが、開発分野に直接関係した仕事ではありません。国連で仕事を得るには、まずは大学院に行く方がよいのでしょうか」。これに対し

て担当者からは、「どんな職歴も無駄にはならないでしょう。専門性だけでなく、人間力が必要となる場面が多い職場です」とのメッセージがありました。

関西学院大学（兵庫県・西宮市）では、沖縄から参加した消防士の方が、「具体的に自分の経験と勉学を活かせる就職先が国連にあるのでしょうか」という質問をしました。また、ある学部生からは「国連のキャリアを目指す前に、職歴があった方が有利なのでしょうか」など。国連で働く面白さ、やりがいについての質問はどの会場でも多く出ていました。

自分自身を見つめ直すきっかけに

「一人ひとりのキャリア・パスは異なるもの。

こうしなければならないという決まった答えはありません」と、多くの人事担当官がアドバイス。ある参加者は「JPO(35歳以下)やYPP(32歳以下)」という年齢制限は意識しています。今回参加して自分が本当に何に関心があるのか、真剣に考えるきっかけとなりました」と話してくれました。

関西地方でと名古屋で実施された初めての「国際機関合同アウトリーチ・ミッション」。その参加者数は、約970名となり、昨年度の関東での参加者800名を大きく上回りました。国際機関でのキャリアについての意識を日本の若い人々の間で高めること、そして、参加者にとっては現実にはどのような手段があるのかを具体的に探る良い機会となったことは間違いありません。



©UN Photo/Marco Dormino

国際機関には、広い分野に多くの職種が存在する。写真は、西アフリカのマリ共和国にある遺跡で、UNESCO職員が保存状況を調査している様子



©UN Photo/Marco Dormino

自分の専門性がどのように世界の役立つかを見極めることが重要。ハイチ共和国でコレラの感染拡大に対応するUNICEFの医療スタッフ

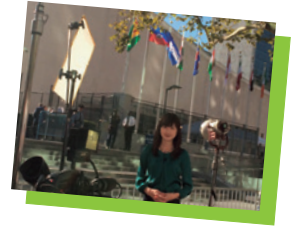


©UN Photo/Art Gaitanis

エボラ出血熱の例に見るように、緊急事態への対応には国際機関同士の連携が欠かせない。専門性に加えて“人間力”が必要となることも多い



気候サミットに参加して 世界の気象キャスターがニューヨークに集う



国連本部で開催された気候サミットでは、世界の気象キャスターが行う「2050年の気象情報」も大きな注目を集めました。日本を代表してNHKが参加し、「ニュースウオッチ9」で気象キャスターを務める井田寛子さんが現地からレポートを行っています。サミットへの参加を振り返っていただきました。

気候サミットに向けて依頼されたのは「2050年の気象情報」を制作し、現地でプレゼンテーションすること。最新のIPCC報告に基づきながら、普段の気象情報とは違う、36年後の未来を予報するというものでした。

遠いようで近いような未来。そこで描くことになったのは、危機迫る日本の姿でした。「熱中症など暑さの影響で亡くなる人が急増。猛烈な台風による10メートルにも及ぶ高潮の発生。クリスマスに見頃を迎える京都の紅葉。さらに沖縄の美しいサンゴの姿がいずれ見られなくなる」など…。いずれも深刻な状況ですが、これらは私にとって驚くような光景ではありませんでした。なぜなら、予想を大きく超える気象現象が、すでに発生しているからです。

今年も、関東甲信の大雪に始まり、夏は広島県の豪雨による土砂災害など、記録続きの年でした。毎年のように塗り替えられる気象の記録。極端な現象。止められない災害。追いつかない予報に自分の無力さを感じることも多くあります。私に何ができるのか。何をしたらよいのか。模索しているときに、今回の依頼をいただきました。

「気象」と「気候」。同じようで異なる二つの分野。私が扱う「気象」は、今日や明日、もしくは一週間という比較的短い期間に注目します。一方で「気候」は、数十年、数百年という長期にわたる気象の状態をいいます。物差しの長さが違うのです。しかし、時間は途切れることなくつながっています。



極端な気象現象が多くなっていることも、今を見つめているだけでは解決につながらず、過去そして未来と、長い目で問題を捉えていかなければなりません。

しかし、普段の気象情報の中では、気候変動について取り上げる時間はありません。今回の試みは、気象キャスターが「気候変動」の問題を伝えるという画期的なものでした。遠い未来のことのようで自分には関係ないと思われてしまいがちなところを、国民の皆さんに身近な存在である私たち気象キャスターが伝えることで、広く知ってもらおうという意図がありました。

当日は、南米やアフリカ、アジアなど世界各国から気象キャスターがニューヨークに集結。気候変動の研究者も集まり、日頃接する機会の少ない気象と気候の専門家が議論する貴重な時間でした。近年の気象の異変、予報の難しさは各国のキャスターも同

様に感じていて、どうしたら人々を災害から救えるのか、その難しさに悩んでいました。すでに極端な気象現象は始まっていて、発展途上国は食料問題や感染症に直面しています。今後さらに影響が拡大することについて、どうすれば危機感を持ってもらえるのかを議論しました。私たち気象と気候の専門家は連携を深め、国民の皆さんに働きかける義務があるということ。そして、先進国、発展途上国とも国をまたいで行動していく時代にきているのだと感じました。

今回私たちが担った36年先の気象の姿を伝える試みは、画期的な挑戦でもあります。制作したビデオを通して気候変動の深刻さが伝わり、人々が行動するきっかけになるとしたら、一つの役割を果たすことができたのかもしれない。世界中の仲間と出会う素晴らしい機会をいただき、気象キャスターという伝える立場にいたることが、何と特別で責任のあることか、改めて自分の仕事を振り返りました。日々の気象情報とともに気候変動に向き合い、発信することを続けたいと思います。



世界各地から集まった気象キャスターと

TOPICS@UN

エボラ出血熱と国連の対応、ウェブで紹介



©UN Photo/Marlon Lopez

西アフリカで患者が増え続けているエボラ出血熱。世界保健機関（WHO）は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言しています。また、国連は公衆衛生に関して設置する初の「国連エボラ緊急対応ミッション（UNMEER）」を展開するなど、様々な対応を行っています。

国連広報センターのウェブサイトでは、感染の拡大阻止に向けた国連の対応をまとめた特別ページを設けています。

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/social_development/ebola/

TOPICS@UN

ヴィクトリア・ベッカムさん、UNAIDS の顔に

12月1日は「世界エイズデー」。国連エイズ合同計画（UNAIDS）の親善大使に、ヴィクトリア・ベッカムさんがこのほど就任しました。現在ファッション・デザイナーとして世界的に活躍する一方、今年2月に南アフリカの HIV 診療所を訪れるなど、エイズの問題に取り組んできたヴィクトリアさん。「女性として母親として、HIV 感染者を支援する責任がある」と述べ、エイズ撲滅に向けた決意を表明しました。夫で国連児童基金（UNICEF）親善大使を務めるデイビッドさんとともに、今後、国連の活動をさらに力強く支えていきます。



©UN Photo/M. Garten

TOPICS@UN

国連デー記念コンサート、NY 本部で開催



©UN Photo/Mark Garten

中国の著名なピアニストで国連ピース・メッセンジャーを務めるラン・ランさんが10月24日、国連本部での「国連デー」コンサートに出演しました。ラン・ラン国際音楽財団の協力のもと、国連広報局が主催するこのコンサートでは、ラン・ランさんをはじめ、5大陸から選ばれたユースのアーティストで構成されるオーケストラが総会議場を舞台に競演。これまで16のグラミー賞に輝いた歌手、作詞家、作曲家のスティングさんもスペシャル・ゲストとして登場し、観客を沸かせました。

TOPICS@UNIC

グローバル・キャリア・セミナーをシリーズで開催

国連広報センターはこの秋、連続3回シリーズで「グローバル・キャリア・セミナー ～世界で活躍するリーダーに求められる資質とは?～」を開催しています。国連人道問題調整事務所（OCHA）で人事担当の経験をもつ澤田泰子さんらを講師として行われました。理想とするリーダー像、国連のコア・バリュー（核となる価値観）、多様性の尊重などのテーマのもと、およそ40人の社会人がディスカッションや体験型ワークショップに熱心に取り組んでいます。





国連広報センターの仕事の醍醐味の一つは、各界の第一人者にお目にかかる機会がたくさんあることです。世界的に活躍するアーティストらが「国連ピース・メッセンジャー」として国連の取り組む平和・人権・開発などの課題について協力してくださっていますが、チェリストのヨーヨー・マさんもその一人です。



「ヨーヨー・マさんの“白熱教室”」

ヨーヨー・マさんが、世界中から集まった多彩な背景をもつ演奏者とともにつくれた「シルクロード・アンサンブル」を率いてこの秋来日した折、国連広報センターのインターンたちとともに本番直前のリハーサルにお邪魔してお話するチャンス을いただきました。

インターンたちにとっても、高校の部活動でチェロを弾いていた私にとっても、大興奮の瞬間です。私たちの姿を見つけたヨーヨー・マさんは、ステージから大きく手を振って歓迎してくださり、手がすくと突然ステージから客席の私たちのところに降りてきて、瞬時にインターンたちと「白熱教室」のスタートです。

「どこの国の出身?」「留学経験は?」「何を勉強しているの?」「何に関心があって国連の事務所でインターンをしているの?」と、ヨーヨー・マさんからはとめどなく質問が湧き出てきます。「いろいろな国から集まっているのは、僕たちの『シルクロード・アンサンブル』と一緒にだね」。2000年に結成された「シルクロード・アンサンブル」は日本の尺八や中国



の笙・琵琶、韓国のチャング、スペイン・バグパイプなど様々な伝統楽器を取り入れ、音の化学反応を起こします。

ヨーヨー・マさんがインターンたちに繰り返し強調したのは、「Never lose your passion (情熱を失わないで)」。そして「Always try to work for the common good (共通の利益のために努力しよう)」と力説しました。「シルクロード・アンサンブル」で多くの次世代の演奏者を登用しているように、彼が若い世代に期待を寄せていることがわかります。

いつもCDで演奏を聴いている音楽家が目の前にいて、若者たちとフラットに、まるで仲間のように気さくに言葉を交わしていることが、まるで夢のよう。明るくフレンドリーな人柄こそがヨーヨー・マさんのチェロの音色の源泉なのかもしれないー そう感じた出会いでした。

【写真上から】リハーサル中にもかかわらず、気さくに話しかけて下さるヨーヨー・マさん（左端）／2006年に国連ピース・メッセンジャーに任命されてから、国連の活動をサポートし続けている／結成15周年を迎える「シルクロード・アンサンブル」

©UN Photo/Marco Castro

©UN Photo/Eskinder Debebe

Contents

P2-3 国連は2015年、創設70周年を迎えます

P4-5 考えてみませんか、国連でのキャリア
関西と名古屋で初の合同採用説明会

P6 気候サミットに参加して：
NHK「ニュースウォッチ9」気象キャスター 井田寛子さんからの報告

P7 TOPICS@UN：エボラ出血熱、国連デー記念コンサート、UNAIDS親善大使、キャリア・セミナー

P8 根本かおる所長の国連だより



発行：国際連合広報センター

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-70 国連大学本部ビル 8階

TEL：03-5467-4451 URL：http://www.unic.or.jp